

保育者養成校におけるアドレナリン自己注射薬(エピペン®)実技演習の効果と課題(2)

— シナリオを用いたロールプレイを通して —

Effects and Problems of Adrenaline Auto-injector (EpiPen®) Practice
in Nursery Teacher Training Courses :
Usefulness of Role-Playing Scenarios

今井景子¹⁾・弓田安希子²⁾

IMAI, Keiko · YUMITA, Akiko

Summary :

Background and Objectives: Anaphylaxis reactions in preschools are not rare, so staff should be trained to assess symptoms and administer medication. A workshop on how to use an adrenaline auto-injector (EpiPen®) was conducted along with a questionnaire survey at a college of childhood education. The survey revealed a prevalence of negative impressions. Therefore, scenarios to reassure students were developed and the effects of the exercise were considered.

Methods: A workshop including how to use an EpiPen® and role-playing with scenarios was conducted with 1st-year students at Hosen College of Childhood Education. A total of 66 out of 77 records were analyzed.

Results: Negative impressions were expressed by 27 students (40.9%), and role-playing did not resolve these negative feelings. Thirty-one students (47.0%) felt that they had become able to use an EpiPen® in case of an emergency. Sixty students (90.9%) responded that the workshop was highly beneficial.

Conclusion: Though negative feelings could not be eliminated by role-playing, repeating scenarios could more effectively impart knowledge to the students and increase the efficiency of the workshop.

Key word : food allergies, anaphylaxis, EpiPen®, role-play

I. はじめに

社会情勢の変化や保育園の教育の内容の質を高める観点から2017(平成29)年3月に保育所保育指針が改訂され、翌30年4月1日から施行された。今回の改訂で新しくアレルギー疾患を有する子どもの保育について「保護者や医師と連携して、専門性を生かした対応をする」¹⁾旨が言及された。また、保育所保育指針解説においては、「食物アレルギーのある子どもへの対応」のなかで、「アナフィラキシーショックへの対応については、エピペンの使用方法を含めて理解し、身に付けておく必要がある」²⁾と保育者はより高次な対応ができることを求めら

れた。

実際に、保育関係施設では食物アレルギー児(以下、FA児)は、9割以上の保育施設に在籍し、エピペン®(以下、エピペンとする)を処方されている子どもがいる施設は2割に上っている³⁾。エピペンは、アレルギーのアナフィラキシーショックの症状を和らげるためのアドレナリン製剤を自己注射するための器具で、注射器に薬液があらかじめ充填されたキット製剤である。現在は健康保険適用の処方薬である。食物アレルギーのアナフィラキシー発生時には、迅速、かつ適切な対応が必要となるため、保育所などでは園児・児童の状況によっては、保育者が保護者や救急車の到着を待たずにエピペンを使用することが認められている⁴⁾。

保育活動の中には、食事や食品、食品パッケージ、動植物といったアレルゲンとなりうるものに触れる活動が

1) こども教育宝仙大学 講師

2) こども教育宝仙大学 看護師

多くあり⁵⁾、保育者は食物アレルギーの知識を持ちFA児の様子を常に観察し、異変に気づいたら素早く対処しなければならない。しかし、食物アレルギーの講習会への参加率は、保育所、幼稚園、認定こども園では57%であるのに対し、小規模保育施設では時間がない、講習会の機会が少ないなどの理由で38%に留まっている⁶⁾。食物アレルギーの知識および緊急時の対応は、どのような施設でも保育職に就いた日から必要であり、保育者として職に就く前に身につけていることが望ましい。

本学では、大学1年次生にエピペンの実技演習を行っているが、感想に「怖い」「不安」という記述が多くみられ、エピペンの使用を経験することで恐怖心が芽生え、使用できなくなるのではないかと懸念が生じた。そこで、保育の場での行動をイメージできるように、ロールプレイのシナリオを作成した⁷⁾。今回、食物アレルギー講習会において、このシナリオを用いたロールプレイを行い、学生が講習会終了後に記入したリアクションペーパーの内容から、演習による「怖い」「不安」な気持ちと、演習の効果、講習の理解度について検討した。そして、講習が学生の知識を充実させ、エピペンをを用いた実技演習が、アレルギー対応を保育に取り入れる意欲を育む礎になることを目的として講習の在り方を検討する。

II. 研究方法

1. 調査日および調査対象者

2018年9月26日および27日大学の講義の1部として食物アレルギー講習会を行った。学生の記入したリアクションペーパーの回収は実施日から10月5日までの間とした。参加者はこども教育宝仙大学こども教育学部1年次生73名であった。

2. 調査内容

(1) 講習会終了後のリアクションペーパーによる調査

回収されたリアクションペーパーに記載された以下の内容を学生の状況・評価・感想として分析した。

リアクションペーパーの内容

1) 学生の状況 (アレルギー有病率)

- ①自分は有病か ②エピペンの有無 ③周囲にアレルギー有病者はいるか ④周囲のアレルギー有病者はエピペンを持っているか。

2) 学生の評価

- エピペン講習の有用性に関して ①エピペン講習のロールプレイの役割 ②エピペントレーナーを使った講習を以前に受けたことがあるか ③今日のエピペン講習は役に立ったか ④エピペン講習はいつ行うのが望ましいと思うか ⑤将来保育職

に就いたとき、必要時にエピペンを使えると思うか。

○講習会に関する理解度 (5段階尺度による選択)

- ①講習内容に関して (6項目) ②エピペンの実技演習に関して (3項目) ③ロールプレイに関して (1項目)

○ロールプレイでの自分の役割の達成度 幼児役1項目、保育者A役5項目、保育者B役3項目、園長役2項目、ナレーター1項目

3) 講義の感想 (自由記入)

- ①ロールプレイを行って ②食物アレルギーについて ③エピペンを打たれる子どもについて ④エピペンを打つことについて ⑤講習を受けて

(2) ロールプレイの映像による調査

ロールプレイ中の学生の様子を動画で撮影し分析した。

- 1) ロールプレイの所要時間 グループごとの所要時間をストップウォッチにより計測した。
2) 演習中の学生の様子 演習の様子から不適切な点、足りない部分、注意すべき点を取りあげ、共同研究者間で合議した。

3. 食物アレルギー講習会の内容 (90分)

保育士選択必修科目「子どもの食と栄養 (発達と食生活)」の中で、「特別な配慮を必要とする子どもの食と栄養」の講義において、「食物アレルギーのある子どもへの対応」として a.食物アレルギーについての講義、b.エピペントレーナーを用いた注射の実技演習、c.アナフィラキシー発症時の緊急時対応のロールプレイを行い講習会とした。エピペントレーナーは、マイラン EPD 合同会社より貸与を受けて2人で1本ずつ用いて行った。

講義内容、時間配分、使用教材は、下記の通りである。

- ① 講義：アレルギーのメカニズム、食物アレルギーとは、アレルギーの症状 (10分)
② 動画視聴：エピペン使い方ガイド⁸⁾ (11分)
③ エピペントレーナー実技演習：取扱い方法の確認、自己注射、他者への注射 (9分)
④ 講義：緊急時の対応 (10分) 緊急時対応マニュアル⁹⁾、症状チェックシート¹⁰⁾
⑤ 講義：ロールプレイ説明 (5分)
⑥ 演習：ロールプレイ打ち合わせ (5分)
⑦ 演習：ロールプレイ実施 (35分)
⑧ 振り返り・講習会のまとめ (5分)

ロールプレイはシナリオに示されている4つの役割に加えて、説明的な文章を読み上げるナレーターの役割を加えて行った。台詞を覚えきれない場合は、シナリオを見ながら演技しても良いとした。演技中に、内容の理解が足りないために不適切な行動をしていたり、特に足り

ない部分がある場合は講師が解説しながら行った。シナリオに含まれていない救急車要請の電話をかける台詞を追加した。

4. 分析方法

回収したリアクションペーパーは、Microsoft Excel を用いて集計し、数量データは、IBM 社 SPSS Statistics ver.20 を使用して分析した。項目により未記入や無効回答がある場合は欠損値として分析ごとに処理した。自由記述のテキストデータはトレンドサーチ2015の Keyword Associator 機能の形態素解析によりキーワード抽出を行い、重要度、関連テキスト数、出現頻度を得た。次いで、Concept Mapper 機能によりキーワード間のマッピングを行った。最大限に枝刈りをしてキーワード群のクラスタをつくるレイアウトを行った。マップにおいては、キーワードをつなぐ線の太さや長さが関連性や共起性を示すが、正確に図示すると重なり合ってしまうため、必要に応じて移動した。

学生の評価に関して、理解度および達成度はリアクションペーパーで選択した‘強くそう思う’を5点、‘どちらかといえばそう思う’を4点、‘どちらでもない’を3点、‘あまりそう思わない’を2点、‘まったくそう思わない’を1点としグループごとの平均を求めt検定を行った。

5. 研究倫理

本研究は、こども教育宝仙大学研究倫理規定に基づき、倫理委員会の承認を受けて実施した。倫理面を考慮し解答による成績への影響がないことおよび個人情報の遵守に関する説明を用紙の配布時に行った。リアクションペーパーは記名式で行い、調査用紙の回答をもって調査への同意とみなした。個人情報が特定されないように匿名化して用いた。

6. 利益相反

本研究における利益相反はない。

Ⅲ. 結 果

1. リアクションペーパーの回収率

リアクションペーパーは講習に参加した73名に配布し71名の回答を得、無効な5名を除外し、66名の回答を分析した。回収率97.3%、有効回答率は90.4%（男14名、女52名、計66名）であった。

リアクションペーパーの「エピペンを打つことについて」の自由記述に「怖い・不安だ」というキーワードを記入した者を「怖い・不安」群、記入がなかった者を「怖い・不安無し」群とした。女性が30.8%と男性の14.3%の倍以上であったが、男女の群間に有意な差はなかった。講習会参加者の性別、「怖い・不安」に関する記述を対象者の分類として表1に示す。

ロールプレイの役割では、「怖い・不安」という記述があったのは、園長役が2名（11.1%）、保育者A役が3名（16.7%）と低く、保育者B役が5名（27.8%）と高い傾向にあったが、群間に有意な差はなかった。

2. アレルギーの有病状況

学生の食物アレルギー有病状況と周囲の人の食物アレルギー有病状況を尋ねた結果、66名中9名（13.6%）の学生が、何らかの食物によりアレルギーを示すことがわかった。エピペンを処方されているものはいなかった。周りにアレルギー有病者がいるかを尋ねたところ、31名（47.0%）のものがいると答えた。また、3名（4.5%）がエピペンを所持している有病者がいることから、重篤なアレルギーを持つものも身近にいることがわかった。また、有病者ではないが「過去にエピペンの講習を受けたことがある」というものが1名おり、学校教育の中でも講習の場があることがわかった。

3. エピペン講習の有用性に関して

実技演習を行って「必要時にエピペンを使えると思うか」、「エピペン講習は役に立ったか」、「エピペン講習はいつ行おうのが望ましいと思うか」、を5段階尺度で尋ねた。

「必要時にエピペンを使えると思うか」という質問について、使えるが31名（47.0%）、どちらともいえない

表1 対象者の分類

	人 (%)		
	男性	女性	合計
講習会受講者	14 (21.2)	52 (78.8)	66 (100)
「怖い・不安だ」という記述の有無			
「怖い・不安無し」群	12 (85.7)	36 (69.2)	48 (72.7)
「怖い・不安」群	2 (14.3)	16 (30.8)	18 (27.3)

が28人(42.4%)、使えないが7名(10.6%)であった。

「エピペン講習は役に立ったか」という質問について、とても役に立ったと回答したものは60人(90.9%)、どちらかというと役に立ったというものが5人(7.6%)で、受講者のほとんどのものが役に立ったと感じていた。昨年度の調査では、同じ問いへの60人の回答のうち、とても役に立ったと回答したものは47人(78.3%)、どちらかというと役に立ったというものが9人(15%)であり、昨年度と同様に有用性は高いと考えられていた。

「エピペン講習はいつ行うのが望ましいと思うか」という質問について、大学1年次が23人(34.8%)、大学2～4年次が13人(19.7%)、保育者の仕事に就く前の研修28人(42.4%)で、保育者になってからと答えた者はいなかった。昨年度の調査では、大学1年次が27人(45.0%)、大学2～4年次が17人(28.3%)、保育者の仕事に就く前の研修13人(21.7%)、その他2人(3.3%)、無回答が1人(1.7%)であった。大学1年次および2～4年次が減少して、保育職に就く前の演習が増加した。

「必要時にエピペンを使えると思うか」、「エピペン講習は役に立ったか」、「エピペン講習はいつ行うのが望ましいと思うか」、についての効果を「怖い・不安無し」群、「怖い・不安」群ごとに図1、図2、図3に示した。

「必要時に使えると思うか」では、「怖い・不安」群は、'使える'ものは23.5%で、「怖い・不安無し」群47.9%に対して半分以下であった。また、'使えない'ものも50.0%で「怖い・不安無し」群の12.5%の4倍と有意な差はないものの、使えないと思うものが多かった。

「エピペン講習は役に立ったか」に対しては、「怖い・不安」群の'とても役に立った' 'どちらかというと役に立った'を合わせると100%のものが役に立ったと回答していた。

「怖い・不安無し」群も同様に、役に立ったと回答したものが97.9%で講習は非常に役に立ったと回答していた。

「エピペン講習はいつ行うのが望ましいか」に対しては、「怖い・不安」群は、大学1年次が44.4%、大学2～4年次が16.7%、保育者の仕事に就く前の研修38.9%と回答しており、「怖い・不安無し」群が大学1年次が31.3%、大学2～4年次20.8%、保育者の仕事に就く前の研修43.8%と比較すると、大学1年次のうちに行うのが望ましいと考えるものが多かった。「怖い・不安」だから講習を後回しにするのではなく、早いうちに行うのが望ましいと考えていることがわかった。

4. 講習に関する理解度

本講習は、a.食物アレルギーおよびエピペンに関する講義、b.エピペントレーナーの実技演習、c.ロールプレイの三つの内容になっている。

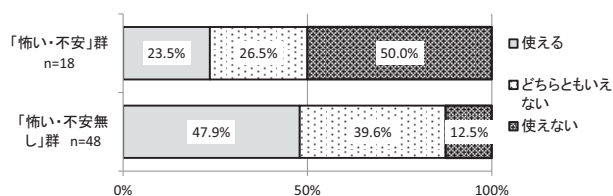


図1 必要時に使えると思うか n=66

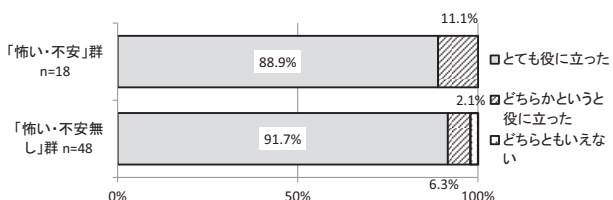


図2 エピペン講習は役に立ったか n=66

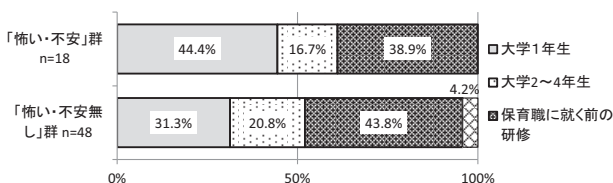


図3 エピペン講習はいつ行うのが望ましいか n=66

全体の理解度および「怖い・不安無し」群、「怖い・不安」群のそれぞれの理解度を表2に示す。

a.講義 資料にプリントおよび動画を用いて説明した内容に対する理解度である。プリント中心の内容の'食物アレルギーを理解できた'が、4.59点、'アナフィラキシーを理解できた'4.61点であった、'エピペンのタイミングを理解できた'が4.56点であった。動画を中心に用いた'エピペンを理解できた'が4.82点と最も高く、次いで'エピペン使用法を理解できた'が、4.77点、'エピペン使用の注意を理解できた'が4.74点と高かった。

b.エピペントレーナーを用いた実技演習 'トレーナーを正しく持てた'が4.8点、'トレーナーで他者に注射練習できた'が4.74点、'トレーナーで自己注射練習ができた'が4.71点であった。エピペントレーナーによる実技演習は概して理解度が高く、講義を聴くことより実技演習の方が理解度が高くなっていた。自己注射練習より、他者に対する注射練習の方がよく理解されていたのは、他者に対して行う場合は、手順を良く理解して「手を添える」「注射後よくもむ」ことに注意を払って行うなど、丁寧に説明した結果ではないかと考えられる。

c.ロールプレイ 'ロールプレイの役割を理解できた'4.6点で、自ら参加する内容であったにもかかわらず理解度は高くなかった。

講習の理解度を「怖い・不安」の群別に見ると、「怖い・不安」群は、a.講義のほとんどの項目で「怖い・不安無し」群より理解度が高くなっていた。特に'エピペ

ン使用の注意を理解できたが’ 4.78点であり「怖い・不安無し」群の4.60より高かった。また、理解度が低くなった項目は‘エピペントレーナーを正しく持てた’ 4.72点、‘食物アレルギーを理解できた’ 4.56点であった。

ロールプレイの役割と講義の理解度を図4に示す。ロールプレイの中で行う行動や発言は、学生が自分たちで話し合っ割り振った。理解度の平均は、幼児役4.78、園長役4.78、保育者A役4.48、保育者B役4.70、ナレーター4.77で有意な差はみられなかった。役割で見ると、園長役の‘エピペンを理解できた’が最も高く、また、ほとんどの項目で理解度が高かった。また、ロールプレイの台詞は無いがエピペンの使用方法について解説が多いナレーターも幼児および園長と同程度の理解度であった。幼児に声をかけ続ける役柄で台詞が多い保育者A役が、ほとんどの項目で理解度が低かった。

5. ロールプレイの役割と自己評価

(1) ロールプレイの演技時間

3クラスの合計で16組がロールプレイを行った。40文1600字ほどのシナリオを暗記した上で行う予定であったが、最初の1組が何度も滞っていたため、シナリオを見ながらの演技となった。

シナリオを読みながら行った演技15組の所要時間は、5分11秒±28秒であった。

(2) ロールプレイ役割の達成度

ロールプレイでは、それぞれの役割に行うべき内容を示してある。それらができたという達成度を調べた。調査した結果を図5に示す。

‘エピペン使用の注意のチェックができた’（ナレーター）が4.83点で最も高く、次いで‘マニュアルとエ

ピペンの準備ができた’（保育者B役）が4.75点であった。‘エピペンを使用できた’（園長役）が4.58点、‘エピペン使用の介助が出来た’（保育者A役）4.54点、（保育者B役）4.44点であった。‘症状に合わせた体位をできた’（保育者A役）は、3.93点と最も低く、アナフィラキシーの症状を理解した上でそれに合わせた体位をとらせていたものはほとんどいなかった。ロールプレイの台本に書いてある横臥させることだけであった。次いで‘保育者A・Bへの指示ができた’（園長役）4.25点、‘幼児への声かけをできた’‘人を呼べた’（ともに保育者A役、同点）4.29点とシナリオに書いてあっても、ほかの演者に働きかける内容は、達成度が低かった。

(3) 講義内容の理解と講習の有用性

講義の理解度と講習の有用性との関係を見るために相関を求めた。その結果を表3に示す。

表3 講義内容の理解と講習の有用性に関する相関

	講習は役に立ったか
食物アレルギーを理解できた	n.s.
アナフィラキシーを理解できた	0.340**
エピペンを理解できた	0.444**
エピペン使用法を理解できた	0.459**
エピペン使用の注意を理解できた	0.297*
エピペン使用のタイミングを理解できた	n.s.
トレーナーを正しく持てた	n.s.
トレーナーで自己注射練習できた	n.s.
トレーナーで他者注射練習できた	n.s.
ロールプレイ役割を理解できた	0.289*

*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$

表2 講習の理解度

		全体		「怖い・不安」なし n=48		「怖い・不安」 n=18	
		平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差
a. 講義	食物アレルギーを理解できた	4.59	.065	4.60	.494	4.56	.616
	アナフィラキシーを理解できた	4.61	.074	4.58	.613	4.67	.594
	エピペンを理解できた	4.82	.052	4.81	.445	4.83	.383
	エピペン使用法を理解できた	4.77	.052	4.77	.425	4.78	.428
	エピペン使用の注意を理解できた	4.74	.058	4.60	.449	4.78	.548
	エピペンタイミングを理解できた	4.56	.081	4.54	.651	4.61	.698
b. エピペントレーナー 実技演習	トレーナーを正しく持てた	4.80	.058	4.83	.377	4.72	.669
	トレーナーで自己注射練習できた	4.71	.067	4.71	.504	4.72	.669
	トレーナーで他者注射練習できた	4.74	.062	4.74	.504	4.83	.514
c. ロールプレイ	ロールプレイ役割を理解できた	4.60	.090	4.60	.494	4.78	.548

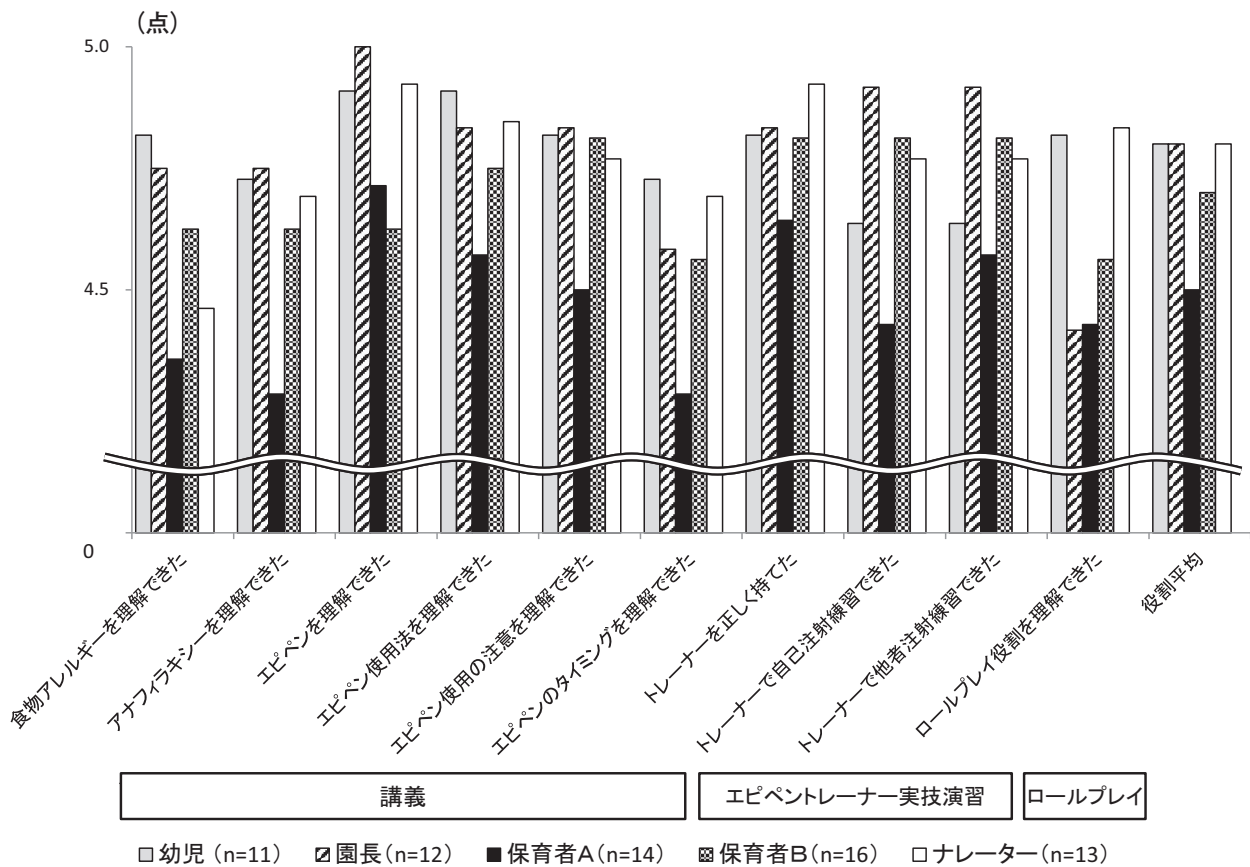


図4 ロールプレイの役割と講義の理解度

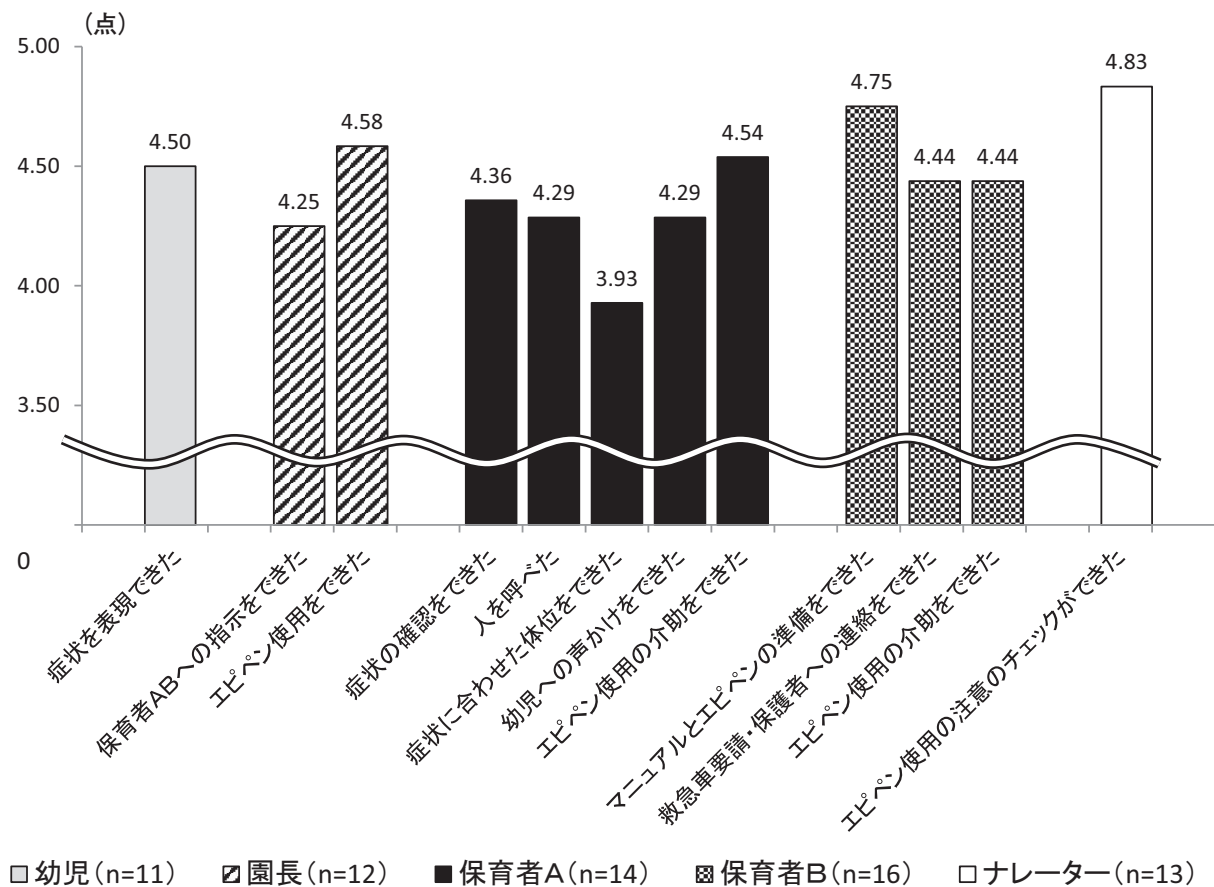


図5 ロールプレイ役割の達成度

‘アナフィラキシーを理解できた’、‘エピペンを理解できた’、‘エピペン使用法を理解できた’、‘エピペン使用の注意を理解できた’、‘ロールプレイの役割を理解できた’に正の相関が認められた。

（4）学生が行うロールプレイの評価と問題点

研究者2名がそれぞれロールプレイを行う学生の様子の記録動画を観察し、注意が必要な点を抽出した。

【全体】 多数の学生がシナリオから視線を外さず演じていた。気遣うべき幼児の様子を見ないで、役割を演じるのに精いっぱいなようすが見受けられた。

【幼児役】 アナフィラキシーの症状は多種であるが、多様な症状を表す演技はなかった。

【保育者 A 役】 幼児の顔を見ないでシナリオを読む、幼児のそばに寄らない、お腹が痛いというのに痛い場所を見ない、援助を求める際に大きな声を出さない、エピペン注射の介助の際にしっかりと押さえない、幼児に対して様子を見ながら声かけをできる者とシナリオを読むだけの者がいた。

【園長役】 緊張感が無いものがいた、幼児の様子を見ることがない、報告を受ける際に幼児を見ずに立ったままずっとシナリオを見ている、症状チェックシートの確認をしない、エピペンを打つ前にポケットの中身を確認しない、エピペンを打つ際の手の添え方がわからないなどの様子が見られた。事前にエピペンの打ち方を練習していたので、太もも外側部にエピペンを押し付けて打つことは徹底されていた。

【保育者 B 役】 幼児の様子を気にして様子を見ることがない、遠巻きに立っている、エピペン介助時に肩をおさえる動作があるが幼児のことを気にしないでおさえつけるのみの者がいた、園長役を呼ぶ、エピペン・緊急時対応マニュアルを取りに行く動作を機敏にできない、緊迫感がない者がいた。

【ナレーター】 きちんとナレーションを行う者がいる一方、演者の様子を見ないでただ読んでだけの者がいた。声が小さく聞き取りにくい者もいた。

6. 自由記述

自由記述された項目の「エピペンを打つことについて」に関して、キーワードの形態素解析を行った。「ロールプレイを行って」および「講習をうけての感想」は、学生の記述とその傾向を結果とした。

（1）「エピペンを打つこと」に関する記述

リアクションペーパーの自由記述から得られたキーワードの重要度、関連テキスト数、出現頻度を重要度の上位20位までを表4に示した。昨年度の報告では、エピペンを打つことについてリアクションペーパーを提出した60人のうち18名（30%）が「怖い・不安」と答えた。

表4 「エピペンを打つことについて」のキーワードの重要度と出現頻度

順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度
1	打つ	2.644907	43	65
2	思う	2.569687	42	58
3	エピペン使用	2.352706	22	30
4	子ども	2.180482	22	27
5	出来る	2.117939	15	17
6	使用法	2.117615	9	12
7	命	2.050818	16	17
8	不安	1.894654	10	14
9	怖い	1.822754	10	12
10	大切	1.821604	10	11
11	必要	1.793215	9	10
12	なる	1.641832	19	19
13	感じる	1.577288	10	12
14	保育者	1.486167	9	9
15	する	1.397559	8	8
16	迷う	1.365524	6	7
17	練習	1.35687	7	8
18	人	1.350121	6	7
19	自分	1.331829	8	10
20	したい	1.267852	6	6

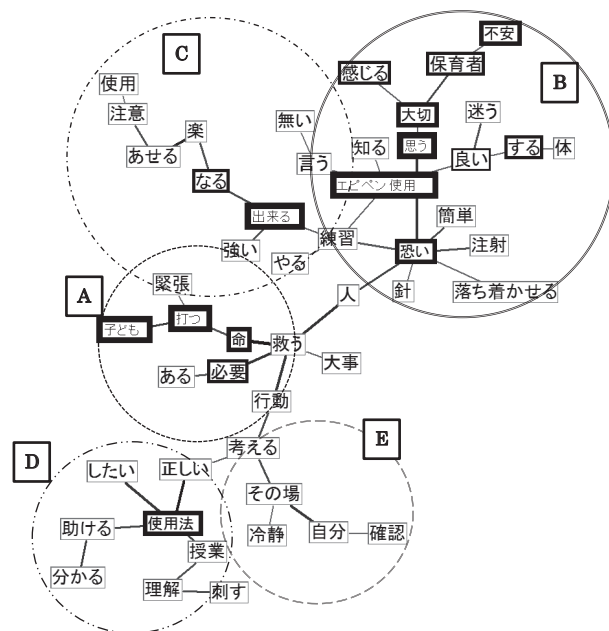


図6 「エピペンを打つことについて」重要キーワードのコンセプトマップ

本調査でも66人のうち「怖い」という記述が12回（18.2%）、「不安」という記述が14回（21.2%）、合計26回（39.3%）あった。語句の抽出法が違うため単純に比較はできないが、シナリオを用いてロールプレイを行っ

でもそういった不安感や緊張感は低減しない結果となった。

また、記述された語について重要度の高い50個のキーワードから作成したコンセプトマップを図6に示した。特に、重要度の高い20位までのキーワードのノードを太枠で示した。

キーワード(カッコ内は順位)が、「打つ(1)」、「子ども(4)」、「必要(11)」、「命(7)」を中心とした『子どもの命を救うために必要』を表すクラスター[A]、「思う(2)」、「エピペン使用(3)」、「怖い(9)」、「大切(10)」、「不安(8)」、「感じる(13)」、「保育者(14)」を中心とした『エピペン使用は大切だと思うのが怖い。保育者は不安な気持ちがある。』と考えるクラスター[B]、「出来る(5)」、「なる(12)」、「練習(17)」を中心とした『練習をして、あせらないようにエピペンを使用できるようにしなければいけない』と考えるクラスター[C]、「使用法(6)」、「授業(34)」、「理解(24)」を中心とした『授業で使用法を理解する』と考えるクラスター[D]、「自分(19)」、「その場(46)」、「冷静(45)」、「確認(47)」を中心とした『自分はその場では冷静にならなければならない』と考えるクラスター[E]、に分類された。

(2)「ロールプレイを行って」に関する記述

実施することで「自分が行動をおこなわなければならない」ということを自覚する内容が66人中28人と多く見られた。以下にその一部の内容を記載する。

- 1人1人が役割を持つことでそれぞれの気持ちになれるのでいいと思いました。またこういうロールプレイをすることで、先生になったときに対応できる可能性が上がるのでひとつひとつが大切だと感じました。子供の命に関わることなのでエピペンを打つ時は真剣にやりました。エピペンを使うようなことにならないように、アレルギーになるようなものを近くに置いたり食べさせないようにしていこうと思いました。万が一の時のためのエピペンなので、そうならないように気をつけようと思いました。(保育者B役、アレルギー無し)
- 「演技やロールプレイを活用してエピペンの使い方などのような対応をするかなどの理解を深められました。実際におこる前に事前に準備しておくことが必要だと改めて思いました。(保育者B役、アレルギー無し)」
- 台本があることで実際に対応の流れがよく理解できました。また、子供の受け答えとして「大丈夫」が多く、現場のような臨場感を感じました。「大丈夫」と言われて鵜呑みにするのではなく保育者側から具体的な症状を聞き出して‘yes’ or ‘no’を導いていくのだと学びました。それに伴い表現する言葉を保育者と子供に

周知しておくことが必要だと感じました。また子供を驚かせないために、保育者の落ち着きが第一だと、ロールプレイを行いひしひしと感じました。(保育者A役、アレルギー無し)

(3)「講習を受けての感想」

「いざという時のために備える」66名中23名、「保育者として行わなければいけない」66名中12名などの記述があった。

- 「まだまだ不安なことは多いですが、アレルギーのこと、アナフィラキシーのことを少しは知ることができてよかったと思います。保育所や幼稚園で行う活動に注意を払うことを忘れてはいけないと思います。食物アレルギーの症状はいろいろあって覚えておく必要があります。エピペンを迷わず打てるような判断力も現場に出るまでにつけたいです。今回このような授業があってよかったなと思います。(保育者B、アレルギー無し)」
- 「アレルギーがでてこんなにも大変なことになるとは思ってもいませんでした。保育士になったらアレルギーのある子供、エピペンを持っている子供をしっかりと把握しておかなければならないことがわかりました。(園長役、アレルギー無し)」
- 「アレルギーはとても怖いものと思った。保育所などでは自分達がやらないといけないから遠慮したらいけないと思った。怖さを捨てなければいけない。(園長役、アレルギー無し)」

IV. 考 察

1. 対象者の状況

対象者の男女比はほぼ1:4であった。「怖い・不安だ」という記述は女性の約30%、男性の約14%にあり、女性の方が多かったが、性差は有意ではなく他に原因があると考えられた。エピペンを打つことは怖いことであると考えられるが、その気持ちに向き合いながら、必要なことを行えることが重要である。

ロールプレイの役割では、男性が園長役を行っていた割合が高かった。男性が責任ある立場になることを想像して自分から希望したのか、エピペンを打つ役をやるように促されたためかは調査できなかった。園長役はエピペンを打つ役であり、子ども役と保育者A役は会話形式の台詞が多い。比較的台詞が少ないが動きがある保育者B役と、会話はほとんどなく説明をするナレーター役の中で、学生がどのような判断で役を選択したかは不明であるが、どの役に当たっても存在意義の大きいシナリオが重要と考えられた。

アレルギーの有病状況は、13%の学生が食物アレルギー

ギーの症状を持っており、昨年度の調査および他の調査¹¹⁾でもほぼ同様に約15%が有病であった。乳幼児の有病状況¹²⁾と比較すると非常に高い。大人のアレルギーの有病率は明確に示されていないが、年齢を重ねるにつれて摂取する食品の幅が広がり、食後の異変に自ら気づくことができるようになるため、食物アレルギーである事を自覚するものが増えると考えられる。

また、学生の半数近くが周りに食物アレルギーの有病者がいることを認識していた。食物アレルギーの認知度は今回調査しなかったが、食物アレルギーとアナフィラキシーが結びつくことで、エピペン使用が身の回りでも起こり得ることが認識されたのではないかと推測される。

2. エピペン講習の有用性

エピペンを使えると思うか

今回の講習後、47%が「エピペンを使えると思う」、10.6%が「使えない」と回答した。エピペンを預かっている施設で、「エピペンを使用しなければならないかの判断をせまられることがあり、使用した」4.0%、「判断をせまられたが、判断できずに使用しなかった」0.8%との調査報告がある¹²⁾。エピペン使用の判断は、講習会などに参加して学んでいく必要があるが、吉野らは、「食物アレルギーとエピペンに関する講習会、エピペンについての詳細な講義とトレーナーを用いた実技指導を行い、参加者にアンケートしたところ、講習会後には理解がかなり改善していた。しかし、保育士では、講習会後に『エピペンを使用しないといけない状況になった場合に、使用する自信があるか』との問いに、『やや自信がある・自信がある』と回答したものが合計で33.3%、『まったく自信がない』と回答したものは11.1%おり、有意な不安の低下はみられなかった¹³⁾と報告している。今回の講習では過去にエピペンの講習を受けた学生が1人いたが、大部分が今回初めて学んだものであった。それでも、今回の講義で半数近い人が使えると思ったのは、講義によりエピペンの使い方を詳細に学び、ロールプレイのシナリオが学生にも理解できる内容であったことと、自分で行うと同時に、繰り返し他者の演技を見て理解を深められたためであったと考えられる。さらにエピペンを打つ対象が、自分が命を守らなくてはいけない幼児であったことで、主体的に動かなければならないことをイメージできたからではないかと考えられる。

「怖い・不安」と記述したものでは、50%のものが「使えない」と回答していたが、講習を通して「怖い・不安だが使える」ことを目指す方法をさらに考えていく必要があることが示唆された。

エピペン講習は役に立ったか

90%以上の学生が、講習は役に立ったと考えていた。「怖い・不安」という気持ちがあっても、保育者として必要な知識技能と認識されていることがわかった。

エピペン講習はいつ行うのが望ましいか

1年次生は、まだ実習などは行っておらず子どもに直接かかわる経験が少ない。自分が保育者として行動をすることを具体的にイメージすることは難しい。そのような状態の中で、緊急時対応のロールプレイを行うことは難易度の高いことであったが、ほとんどのものが大学生のうち、あるいは保育者の仕事に就く前の研修で行っておくのが望ましいと考えていたことから、保育者になるために身につけておきたい力の1つとして認識されたと考えられる。特に、「怖い・不安」と思っている学生の方が、大学1年次生の早いうちに講習を行うのが望ましいと考えていたのは、怖い気持ちがあるからこそ、早く覚えて身につけたいと考えていたのではないかと推測される。

講習の有用性と講義の理解度

講習の中心となるアナフィラキシーの対応とエピペンに関する理解度が高かった学生は、本講習は役に立ったと考えていた。

保育における食物アレルギーを学ぶ上ではその範囲は、免疫のメカニズム、原因食品、保育におけるアレルギーへの対応の注意事項、誤食の予防、緊急時の対応など多岐に渡る。90分の講習では、全範囲にわたって理解し覚えることは不可能である。その中で、学生は、アナフィラキシーとエピペンに関して理解を深めたことは有意義なことであったと考えられる。

保育の現場に出る前に、基本的な知識として緊急時対応を学んでおくことが望ましい。学生のうちに行うには、「保育を行う者」に適した内容の講習が望ましいと考えられる。

3. 「怖い・不安」への対応

講習の理解度は、「怖い・不安」群がほとんどの項目で高かった。「怖い・不安無し」群より低かった項目は「エピソードトレーナーを正しく持てた」「食物アレルギーを理解できた」であった。「エピソードトレーナーを正しく持てた」に関しては、「怖い・不安」という気持ちがあり、トレーナーに触りたくなかったため自己評価が低かった可能性がある。また、自己注射と他者注射は実施できているため、「エピペンを逆に握ると、自分の指の方に向かって針が出るため危険である」と注意したことが印象に残り、怖さを印象付けた可能性があるため、恐怖を与えない様な説明にする必要があると考えられた。

4. ロールプレイの役割と評価

ロールプレイの達成度

ロールプレイは、幼児役、先生3役、ナレーター役の5種類の役割を分担して行った。人数が少ないグループは演じる際に他のグループの人に足りない役を演じてもらい、各クラス5回または6回の発表を行った。

演じる役割によってロールプレイの受け止め方が違うのではないかと考えられたので、それぞれの役割における達成度を調べた。このシナリオの中心になるのは、体調不良の幼児を発見して声をかけ続ける保育者A役とエピペンを注射する園長役の2名である。ロールプレイの達成度は、この2名以外の者が高く、特に、シナリオの解説部分を読むナレーター役と、指示されて指定された場所にエピペンと症状チェックシートを取りに行くといった行動が中心の保育者B役は達成度が高かった。症状に合わせた体位にする、のように書かれた以外の行動を自分で考えて実施することや、人に向かって指示をする、人を呼ぶ、声かけをするなど他者と会話をするような部分の達成感が低くなっていた。会話は日ごろのコミュニケーションが関係してくるので、日ごろから仲の良い者同士でグループを編成することによって改善することもあると考えられる。

ロールプレイの効果

学生は自分が演じるのと同じ役割を同級生が行うので、興味を持って見ることができ、振り返ることができた。違う演者で何度も同じ台詞や動作を見ることは追体験的学習となり理解が深まるので、エピペン使用のタイミングやアレルギー児への対処法が口頭や資料のみの演習より身についたのではないかと考えられる。実技演習で行った役割や手順が一部でも知識として身につければ、学生の自信となる。保育者となってからはそれぞれの施設に応じて講習を受け、緊急時に備えた対応ができるように考えていくきっかけになれば良いと考える。

ロールプレイの評価

学生のロールプレイの自己評価と講師の行った評価では乖離が見られた。学生は滞ることなく終えることができれば、「できた」と認識していたと考えていたと推測されるが、講師は、説明を聞いてロールプレイの中で行って欲しいと考えていた技術や行動は十分できていなかったと評価した。特に、幼児を囲んで様子を見ながら症状をチェックすることが不十分であった。しかし、たった一度短時間の演習でそれらが十分に身につけるのは難しいことである。緊張感を持って行う、保育者が幼児の様子を傍らに寄り添いよく見て声をかけること、エピペン使用と介助法の理解、幼児役は、嘔吐や激しいせき込みの症状のなかからアナフィラキシー症状を演じることなど、前もって具体的に身につけて欲しいことを明らかに

して、それを行うことを目標として演技を行うことにすれば改善されると考えられた。

シナリオに関する問題点

ロールプレイにかかる時間は、5分前後で自分が演じ、他者の演技を見て比較するには無理のないものであったと考えられる。

シナリオは4人で演じる内容として作成されていたが、各自が自分の演ずる内容を自信をもってできるほどではなかったため、ナレーターの役割を追加した。何度もエピペンの使用について解説を聞くことができたので、講習で行うにはナレーターによるナレーションを入れる方が良いと考えられた。

シナリオにはエピペンを打つ足が右足の指定があるが、演じる中で立ち位置が変わってくるため、打つ足の左右は演者に選択させても良いのではないかと考えられた。

5. 「エピペンを打つこと」に関する記述の分析

学生の記述を形態素分析したところ「子どもの命を救うために必要」、「エピペン使用は大切だと思うが怖い。保育者は不安な気持ちがある」、「練習をして、あせらないようにエピペンを使用できるようにならなければいけない」、「授業で使用法を理解する」、「自分はその場では冷静にならなければならない」の5つのクラスタに分かれた。すなわち、「使用者の気持ち」、「目的」、「使命感」、「使用法」、「使用のイメージ」に分かれた。保育者になる者として緊急時対応に真摯に向き合う姿勢がある一方、「怖い・不安」という使用者の気持ちは大きな要素であった。この気持ちは簡単には払拭できないことから、原因となる要素を少しずつ洗い出して、受講者がエピペンは「怖いけれど使える、不安だけれど使える」と考えられるような経験になる講習を行うことを目指していく必要があると考えられた。

V. まとめ

幼児教育科大学1年次生に、エピペンの使用法、緊急時対応のロールプレイを含む食物アレルギー講習会を行った。シナリオを用いたロールプレイを取り入れても「怖い・不安」という気持ちは取り除かれなかった。しかし、シナリオを何度も繰り返して見ることで身につけ、演習は有用なものにとらえられたことが示唆された。

今後、他学年次学生に複数回の講習を行うことにより、食物アレルギーおよびエピペン使用のタイミングの理解度を上げてゆく必要がある。さらに、エピペン使用へ自信をつけられるような方法を模索してゆきたい。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針、
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>
(2018年8月20日閲覧)
- 2) 厚生労働省：保育所保育指針解説、
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>
(2018年8月20日閲覧)
- 3) 総務省：乳幼児の食物アレルギー対策に関する実態調査結果報告書、
http://www.soumu.go.jp/main_content/000339703.pdf
- 4) 文部科学省：今後の学校給食における食物アレルギー対応について（通知） 医師法第17条の解釈について、平成25年11月27日
- 5) 厚生労働省：保育所におけるアレルギー対応ガイドライン、
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku03.pdf> (2018年8月20日閲覧)
- 6) 本田 まり, 西川 貴子, 佐伯 志保里：小規模保育や家庭的保育における食物アレルギー対応および食物アレルギー講習会に関する実態調査、論攷：神戸女子短期大学紀要 62, 27-35, (2017)
- 7) 今井 景子, 弓田 安希子：保育者養成校におけるアドレナリン自己注射薬（エピペン®）演習の効果と課題、こども教育宝仙大学紀要 9(2), 85-93(2018)
- 8) マイラン EPD 合同会社：エピペン使い方ガイド、
<https://www.epipen.jp/teacher/index.html>
(2018年8月20日閲覧)
- 9) 香川県小児科医会：アレルギー緊急対応時マニュアル改訂版、
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkyoui/hotai/pdf/health/H29allergy-manual.pdf> (2018年9月23日閲覧)
- 10) 東京都福祉保健局：東京都アレルギー情報 navi. 症状チェックシート、
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/allergy/measure/emergency.html> (2018年9月23日アクセス)
- 11) 佐藤 沙穂, 鎌田 浩子：大学生の食物アレルギーについての知識、釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要 (49), 105-116(2017)
- 12) 東京慈恵会医科大学：厚生労働省「平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業」(平成28年3月)、
<http://www.jikei.ac.jp/univ/pdf/report.pdf>
(2018年11月11日アクセス)
- 13) 吉野 翔子, 下寺 佐栄子, 海老島 優子, 平口 雪子, 大和 謙二, 末廣 豊：保育園・小学校関係者の食物アレルギーに対する意識調査～講習会の効果についての検討～、日本小児アレルギー学会誌 29(2), 192-201(2015)